

『ロマンスの王子様♥』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

和やかな空気に覆われた会場内、理央は友人たちのもとへやってきた。

高校と大学の友人といっても、高校の頃の友人がスライドして大学の友人になった者が殆どだ。彼らは会場の隅で稚魚のように集まり、ちょっとした同窓会に会話を弾ませている。

理央に気づいた友人たちは、笑顔で彼を迎え入れた。

彼らは「遅くなってごめん」と謝る理央に、「仕方ないでしょ！」と言って笑いながらアルコールのグラスを用意する。

「ええと……大公殿下って呼んだ方がいいんだよな？ ここじゃ」

理央の携帯に電話をかけてきた船越が、理央とその後ろに立っているルシエルを交互に見て、照れくさそうに笑った。

理央が答えるより先にルシエルが「いえ、別に」と流(りゅう)暢(ちょう)な日本語で話す。

途端に、「うは！ 日本語！」と、周りがどよめいた。

たしかに、白馬の王子様の外見のルシエルから、日本語が飛び出したら誰でも驚く。特に日本人は、英語コンプレックスを持っている者が多いのでなおさらだ。

女性の同級生たちは、理央に「久しぶり」と言うのを忘れ、うっとりルシエルを見ている。

「挨拶もなしにいきなりいなくなったから、俺たちの間じゃ『高塚家は攫(さら)われた？』『夜逃げした？』と、話題だったんだぞ？」

「そうそう。一言言ってくれたら、何かあったんじゃないかって、落ち込んだり」

「そしたら……テレビの特番で、真(ま)理(り)さんの戴冠式(たいくわんしき)だろ？ 目玉ポーンっ！」

「最初は、『王子になった途端、それまでの親しい友人を無視するのか』と腹が立ったけど」

船越が当時のことを思い出したのか、ちょっと怒った顔で言う。

するとみんなも「あれには驚いた」「理央が王子様かよ！」と声を出す。

「あのとき、一気に遠い存在になったと思ってたらいきなりメールが来てびっくりした。でも、嬉しかったよ」

吉川が、理央の肩を叩いて微笑む。

「メールで事情を知って納得した。あれは、ある意味拉(ら)致(ち)だな」

宮川が、懐かしそうに目を細めて理央に言った。

「駆(かける)！ なんだよお前！ 『招待状をもらっても、行けるか分からない』って返事をしてたくせに、来てくれたじゃないか！」

理央の顔が今日一番明るくなった。

宮川は、落ち着いた微笑みを浮かべて理央に近づく。彼は小学生の頃から理央の友人で、何をやるにしても不思議と馬の合う、傍(そば)にいて居心地のいい相手だ。理央がオーデンに行ってから「日本のものを送ってやるよ」とあれこれ気を遣ってくれてい

る。

「昔から突拍子もないことをすると思っていたが、まさか一国の大公殿下になるとは思わなかった。これは……出世とっていいんだよな？ 凄い出世だ」

柔らかいのは口調だけでなく物腰もだ。

宮川はふわりと微笑み、理央の頭をそっと撫でる。

宮川のその撫で方はルシエルに似ていた。日本にいた頃によく撫でてもらってたのに、まるで気付かなかった事に、理央は思わず笑った。

「うん。……それに近い」

「じゃあ、俺たちの中で一番の出世だ」

宮川の声に、友人たちから「まったく」「俺なんて……」と苦笑混じりの声上がる。

「その代わり……地獄のような英語の特訓、マナー特訓、乗馬と、ありえない勉強だらけだったぞ。もう、何度日本に帰ろうかと思ったことか……！」

理央はオーデンに来た当時のことを思い出して、顔をしかめて呻いた。

「英語の特訓はともかく、やっぱりそういう教養系の特訓もあったんだ……」

「まるで映画だな」

「俺なんて、無理無理」

「私も、ちょっとそういうのは……」

友人たちは自分の立場でいろいろと想像し、理央と一緒に呻く。

そして、顔を見合わせて笑った。

周りで歓談していた有名人たちも、仲の良い彼らを微笑ましく見つめる。

「そろそろデザートまで出揃う頃だ。ケーキのいくつかは俺が作ったんだ。是非食べていってくれ」

理央の家事上手はみな知っているのだから、これには歓声上がる。

「会社の連中に自慢できるな。友だちは大公殿下で、しかも手作りのケーキまでごちそうになったって」

一人が言うと、何人かが「そっか、こっちは……今日のパーティーのことは秘密にしてきた」と頷きあった。

「え？ 秘密……？」

理央は首を傾げて尋ねた。

「高塚と仲の良かった連中しか呼ばれてないだろ？ だから高校の同じクラスだっただけのヤツとか、大学の同じサークルに入ってただけのヤツとか、結構いるわけさ」

「そういう連中に限って、マスコミのインタビューを受けるのよねー。私、テレビで見たもん。サークルが同じだけって子が、高塚のことをあれこれ語ってる番組！」

理央は生ぬるい笑みを浮かべて「似たようなのは俺も見た」と頷く。

友人たちも「呆れて、空いた口が塞(ふさ)がらなかった」と、理央と同じように「うんうん」と頷いた。

「宮川たちからいろいろ話は聞いたけど、本人の口から聞くと、ますます大変な『職場』というのは分かったよ。なんといっても、嫌だからといっても退職できないしな」

友人の一人がしみじみと言い、みな異(い)口(く)同(どう)音(おん)に「大変だ」と呟く。

「うん……でも、頑張るよ」

身内はずいぶん遠くになってしまったけれど、友だちは今もこうして傍にいてくれる。確信できて、凄く嬉しい。嬉しすぎて、涙が出てきそうだ。

理央は頬を染めて「そう言ってもらえると嬉しい」と、俯く。  
「なんだよ、もう。しんみりするなって」  
「なんか……凄く嬉しくて。王子様とか言われて……遠巻きにされたらどうしようかと思っ……だから……」  
理央は顔を上げ「みんながいつも通りで本当に嬉しい」と言って、とびきりの笑顔を見せた。  
「人生が変わった出来事は、高塚のせいじゃないとみんな分かってる。それにな、俺たちは『王子様羨(うらや)ましい』って思うほど子供じゃないよ」  
宮川の優しい言葉に、理央は頷くだけだ。  
「俺、新婚旅行はオーデンに決めたわ。うん」  
船越の言葉に、周りから「まずは相手を探せ」と笑いながらの野(や)次(じ)が飛ぶ。  
「はは。オーデン国民は、日本語が分かる人が結構いるし、ヨーロッパの中でも比較的治安がいいから、新婚旅行に向いてると思う」  
すると「早(さっ)速(そく)営業か？」と突っ込みが入った。  
「うん、営業だ。なんてったって、社長が厳しいから」  
理央の言う社長とは彼の姉にしてオーデン王国女王陛下の真理になる。  
理央と一番付き合いの長い宮川は「あー……、あの人は凄い美人だけど怖い人だった」と、何かを思い出しながら呟いた。  
「ツアーがいっぱいあればいいのにと。『大公殿下と昼食会付き』とか。もちろん、限定でね」  
「それ、考えておく」  
「澄ました顔で、お茶飲むなよ？ 似合わないから」  
「そうだな。小指を立ててカップを持たないようにしないと」  
理央は彼らの前で、真剣な顔をして小指を立てて紅茶を飲む真似をする。  
後ろにルシエルが控えている手前、彼らは笑うのを堪えていたが、誰かが「ぶーっ」と噴き出したのを切っ掛けに、爆笑となった。

本文 p73～80 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>